

マタイ受難曲が聞こえる

——ロテルにて——

フランスのタイヤメーカーとの合弁交渉で、パリに出張することになった。ちょうど旧知のピエールと連絡がとれたので、わたしはクライアントの一行よりひと足先にパリ入りした。

11月のパリは鉛色に沈んでいた。

シャルル・ド・ゴール空港に降りタクシーにホテル名を告げると、運転手は首を振るばかりでわたしは当惑してしまった。いつもは安全を考え名の通ったホテルに泊まるが、今回はピエールが予約してくれたのだった。わたしはパリに余り詳しくない。フランス語もできない。

ロテル、ロテル(L' HOTEL, L' HOTEL)

わたしは繰り返すが、運転手は知らないという。住所を書いたメモを見せると、タクシーはやっと走り始めた。

タクシー運転手さえ知らないホテル？

わたしはだんだん不安になってきた。タクシーは細い小路をくねくねと走り回っている。そのうちふと思いあたった。そういえば、ピエールが「ロテル」はフランス語で「ホテル」の意味だといっていたっけ。今夜泊まるのは「ホテル」という名のホテル。運転手に、ただ「ホテルに行ってくれ」といったって、彼も困った筈だ。

住所からいくところら辺なんだが。

タクシーが止まった。だがどこにもホテルらしいものは見つからない。こんな所で荷物と一緒に置き去りにされてはかなわない。夕闇も迫っている……。

BEAUX-ARTS 通りの 13 番地はこの建物に間違いない。

運転手が断言するのでやむなく荷物をおろし、畳 1 畳半ほどの入り口を通り抜け、小さなロビーに入った。

古色蒼然とした年代ものの建物で、家具や調度品も恐ろしく古い。左手の壁に 40 代の見覚えのある男の絵がかかっている。誰だったか……。棚には景德鎮風の壺や坪谷花鳥模様の花

瓶が並んでいる。勿論わたしには本物かどうかはわからない。
30 代後半の、長い黒髪に瞳の大きいミニスカートの女性が出迎える。

ここは、ロテルですか？

ミスター・ヤベ？お待ちしていました。

わたしの名前を知っていたのでひと安心。
だがすぐさま不安になる。こんな古いホテルはたまらない。ホテルは安全と快適さを買うのだから良いホテルでなければダメ。24 時間のルームサービス、即日仕上げの洗濯サービス、CNN、BBC などの英語のテレビ番組、それにサウナ、日本の新聞のサービスが欲しい。このホテルはどれ一つも満たしていないだろう。ピエールはオレの好みを知っている筈なのに気に入らない。それに何とも陰気な宿だ。こんな所に 3 日も泊まるのはかなわない。明日になったらもっと良いホテルへ移ろう……。

ロビーを出ると円筒状の吹き抜けが天井まで届いている。吹き抜けを軸に螺旋状に階段がとりまく。狭い階段は登るたびにガタピシと音をたてる。
ボーイは部屋の前で立ち止まり、15 センチもある大きな旧式な鍵をわたしによこした。ペーパー・キーの時代なのに、こんな大時代的な鍵を使うなんて危険極まりない。ヘアピン一つで簡単に開けられるだろう。印象は益々悪くなる。
部屋の鍵を回すがなかなか開かない。気分は益々滅入ってくる。ピエールの奴の気が知れない。なんだってこんなホテルを予約したんだろう。

部屋に入ると室内はきれいに掃除されているが、17～18 世紀風の内装で、絨毯もベッドも年代ものである。こんなホテルなら旧式の電話交換システムを使っているに違いない。日本への国際電話もまともにはかからないだろう。

——オスカー・ワイルドの宿——

部屋で一休みしていると、電話がなってピエールの声が飛び込んできた。

ピエールはフランス企業の社内弁護士だが、並の弁護士とはちょっと違った。文学や芸術に造詣が深く、高等遊民、無為徒食の生活に憧れていた。弁護士業は身すぎ世すぎの手段にすぎなかったが、弁護士としても極めて優秀だった。ブランド品の偽物が中近東で大量に出回

った時、彼はほとんど徒手空拳で偽造団と交渉した。「危害を加える」とほのめかす偽造団に対し、ピエールは一步も引かず、わずかの「つかみ金」を与えて偽物を全廃させた。大成果である。命がけの交渉であったことを、わたしは知人のイギリス人の弁護士から聞いた。

マサ？ようこそパリへ。ところでホテルの居心地はどうだい？

うーん……。

口を濁したものだから、ピエールはわたしの気持ちを察したらしい。

そのホテルはフランス人でもごく少数の人しか知らないんだぜ。勿論普通の日本人が知っているとは思わないがね。ただの4ツ星ホテルじゃないんだよ。いいかい、例のワイルドが死んだホテルなんだ。普通だったら半年先の予約を入れたって泊まれないんだ。

ふーん、オスカー・ワイルドの宿か。

だからといって、どうということはないが、ただの古宿よりはましか……。そういえばロビーに掛かっていた頬のこけた目の大きい男の絵は、ワイルドの肖像画だったのか。ピエールと夕食の約束をした後、わたしはテーブルの上のパンフレットを手にとった。ワイルドは1900年11月30日、このホテルで死んだ。脳膜炎だった。当時このホテルは「ダルザス」と呼ばれていた。その後1世紀を経て、ホテル・ダルザスは、「ロテル」に改称された。今は「政治家、ショービジネス、ファッション・ビジネスの人々の溜まり場として有名」とある。

奇才オスカー・ワイルドは美に耽り、美を楽しむことを人生の目的とした。幼児より秀才の名が高く、オックスフォード大学でギリシャ文学、ラテン文学で優れた成績をおさめた。「獄中記」で彼はオックスフォード時代を振り返っている。

僕は魂の真珠を鉢に投げ入れた。笛の音に合わせて桜草の咲く道に踏み入った。蜜を食べて生きていた……。

オペラ「ペイシェンス」を書いて、ワイルドは一躍時代の寵児になった。戯曲「サロメ」、小説「カンタベリーの幽霊」、批評集「仮面の真実」を次々と発表し、彼は作家としての名声を確立した。若くして名声を恣しいままにし、社交界の花形となった。

しかし、運命はいつもそうである様に、ある日突然彼を襲う。詩人アルフレッド・ダグラスとの同性愛が発覚し、彼は背教徒の汚名を浴びせられ、投獄された。

まことに人の運命は計り難く、名声は仮そめである。今や彼は名声も親友も失い、永遠の汚辱にまみれた。

2年間の厳しい獄中生活で健康を害し、妻も彼のもとを去った。出獄後は名前も変え、異境のフランスやイタリアを放浪した。こうして、彼は異形の愛に生き、汚辱のうちにホテル・ダルザスの16号室で無残に死んだ。

ワイルドは、しかし、珠玉の童話『幸福の王子』を後世に残した。美しすぎる魂を持った幸福の王子は、身につけたルビーを、サファイアを、そして金箔を貧しい人に与え続け、ツバメとともに死んでしまう。実に「愛」と「死」こそが『幸福の王子』のテーマだった。

——深更のマタイ受難曲——

夜10時半。ピエールとシャンゼリゼの和食店でしたたかに日本酒を飲んだ後、わたしはホテルに帰った。小さなホテルのロビーには、もう誰もいない。

螺旋状の階段を登りかけると、地下から聞き覚えのあるメロディーがかすかに響いてきた。

Wir setzen uns mit Tränen nieder

Und rufen dir im Grabe zu:

ああマタイ受難曲か……。

人一人いないロビーに、最終楽章第68曲の導入部が広がる。予想もしない展開に衝撃を受け、わたしは地下へいざなわれた。

マタイ受難曲は、新約聖書「マタイ伝」に想をとり、イエスの捕縛、裁判、十字架上での刑死をテーマとする。独唱アリアや合唱コラールには、神の摂理への熱い想いが注がれている。深い宗教性、慈愛、慰藉に満ちたバッハのマタイ受難曲こそは、音楽史上最高の傑作である。

地下のレストランはもう閉じて、蛍光灯の藍白の淡い光が石造りの天井と廊下を照らしているだけである。魂の深奥をえぐる調べが、スピーカーから低く静かに流れてくる。わたしは呆然と立ちすくんでしまった。

われらは涙ながらにひざまずき
御墓の中のあなたに呼びかける
やすらかにお休みください、やすらかに！

蛇行する大河が河口へ幾重にもうねって流れる様に、低音の繰り返しがゆったりゆったりと流れていく。人影もない深夜のホテルの地下で、受難曲が流れ続ける。潮騒の様にたゆたう音の波が、身体の隅々まで行き渡る。それは端正なる思索、均整のとれた宇宙の法則を思わせる……。

曲に身を委ねていると、天が裂けて光が降りそそぎ、金色の粒子が一面にはじけ飛んだ。まばゆいばかりの光が満ち、耳を聳する天上の音楽が鳴り響く。目を射るものは幻覚か、耳を刺すものは幻聴か。一瞬わたしは大いなるものの存在を感じ、心地良い酔いも手伝って、呆然と立ちすくんだ。

十字架上で処刑されたイエスは、墓に埋葬される。人々は封印された墓の前でひざまずき、イエスの安らかな眠りを祈る。

お休みください、疲れ果てたお体よ！
やすらかにお休みください、やすらかに。

春のうららかな陽光にまどろむがごとく、旋律はゆったりゆったり旋回していく。

あなたの墓と墓石こそ、
わが不安に満ちた良心の
こちよ憩いの枕、
魂の安らぎの場となるでしょう。

メロディーは、次第に細くかそけくなっていく。

Ruhet sanfte, sanfte ruht!

Höchst vergnügt

Schlummern da die Augen ein.

やすらかにお休みください、やすらかに！

こよなく満ち足りて、

その眼は永い眠りにつくでしょう。

イエスが十字架上で人間の罪を贖って以来、死は恐れの対象から神の恵みによる安らぎへと変わった。バッハは幼くして両親と死別し、妻を失い、多くの子供達を喪ったが、老境に至りついに、この世を超えたところに安らぎを見いだした。死は、永遠の生命への出発点となった。

背教の徒オスカー・ワイルドの惨死と、殉教の徒キリストの刑死。死を恐れた者と死を昇華した者との生きざまが、この小さな古いホテルに凝縮していた。

結局、わたしはホテルに3日間泊まり続けた。